はしがき

私たちはこんにち，都市と切り離せない生活を送っています。都市に住んだり，都市で学んだり，都市を移動したりすること，そうでなくても都市的な生活様式を送ることと無縁な人はいないでしょう。それはもちろん，若い女性たちにとっても同様です。いや，もしかしたら，若い女性たちの方が，SNS で都市での流行を察知したり，都市で見知らぬ男性に絡まれたり，都会的なものを楽しんだり，それに苦しんだりしているかもしれません。

本書の編者たちは首都圏の女子大学で社会学を教えており，編者の一部は都市をフィールドにした研究も行っています。授業をしながら感じるのは，学生たちが都市と深い関わりを持って生きているにもかかわらず，そのリアリティにフィットした都市論のテキストがなく，授業内容もどこか芯を外しているかもしれないということです。むしろ，学生たちが選択する卒業論文のテーマや報告を見たり，聞いたりしていると，「あぁ，そういうふうに都市が見えているのか」，「これはまだまだ掘り下げられていない都市のリアリティだな」と教えられることが多々あります。そう考えると，これまでの「都市論」そのものが，かなり男性中心的に構成されてきたのではないかと反省することもしばしばです。

こうした気づきが本書の出発点です。そこから，若年女性たちの都市経験に照準を当て，「女性にとって都市とはなにか」，そして「都市にとって女性とはなにか」を考える本書の企画ができあがりました。それは2021年の夏，新型コロナウイルスの影響下でオンライン授業が続いていたものの，多くの大学で対面授業も再開され，大学で日常的に学生たちと会うことが叶い始めた頃のことでした。学生たちは素晴らしい柔軟性で状況に対応していましたが，しかし，話を聞けば，家計が急変したり，アルバイト収入が減ったり，就職活動に苦戦したり，イベントごとが減ったりするなかで，孤独と不安を抱えている様子も見てとれました。国内でも国外でも，引き続き女性たちが仕事を失ったり，孤立した家庭内で DV 被害に遭ったりしている実情が明らかになり，さらには女性の自死者の増加も報じられました。パンデミックはこの社会で「女性」と

して生きることの不安定さを可視化したのです。

本書は，パンデミックと女性の関係について直接的に論じたものではありませんが，この時代状況とやはりどこか不可分だろうと思います。編者たちは，オンラインで13回のミーティングの機会を設け，議論を重ねてきました。どのようなテーマやアプローチが必要なのか，編者ら自身が学生時代から学んできた都市文化論と現在の学生たちの関心がズレているとしたら，何が原因なのかなどを真剣に考えたり，学生たちが教えてくれる最近の都市の遊び方などを雑談がてらに情報交換したりしながら，ミーティングは時には深夜まで及びました。執筆者の方々にも草稿を持ち寄ってご参加いただいて，みんなで議論しながら原稿を仕上げることもありました。

本書は一貫して，現代社会を「女性」，とりわけ「若年女性」として生きる人々（ガールズ）のことを考えながら作られました。したがって，トランスジェンダーやシスジェンダーの女性たち，そしてジェンダー・アイデンティティにかかわらず，この社会を「女性」として生きたり，生きざるをえなかったりする／したことのあるみなさんに本書が届くことを願っています。さらに，これまでの都市論にジェンダーバイアスがあるとすれば，本書の提示するいくつかの視点は，都市そのものの捉え方に変更を迫るはずです。その意味では，都市について考えようとするすべての人々に読んで，考えていただきたいと思っています。

以下，序章では本書の目的やこれまでの都市文化論との相違点などを概略的に論じています。その後に続く各章はすべて女性たちの具体的な都市経験について論じています。そしてそれらの章は，都市で「遊ぶ」「つながる」「生き抜く」の３部に分けられています。みなさんの関心に従って，あるいは読みやすそうな順で，お好きなように読んでください。本書が，ジェンダーの視点から都市を考えるための一助となりましたら幸いです。

本書刊行までには多くの方々の支えがありました。まず，編者らの勤務先である，学習院女子大学，駒沢女子大学，相模女子大学，日本女子大学のゼミや講義で出会った学生たち。学生たちがいなければ本書の企画自体が生まれませんでした。それだけでなく，授業内外での発言などを通して，今の「若年女性」として経験する都市について，具体的に教えてくれました。

2022年9月には，駒沢女子大学，慶應義塾大学，相模女子大学，中央大学，日本女子大学の学生に参加してもらい，合同ゼミを実施しました（コラム3参照）。学生たちには「ガールズ×都市」をテーマにグループワークを行ってもらいましたが，みんなで「ガールズ」について議論ができたことに，編者一同，たいへん勇気づけられました。関わってくれた学生たちに，心より感謝しています。

そして，ご多忙のなか原稿をお寄せいただいた執筆者の皆さまのご尽力なくして，本書は完成しませんでした。また編集にあたっては，法律文化社編集部の田引勝二さんに，たいへんお世話になりました。長時間にわたるミーティングにも何度もお付き合いいただきました。どうもありがとうございました。

2023年1月

編者一同